

新出『河海抄』の解題と翻刻（その一）

安永 美保・中村 祐美・小坂部悟美
黒川 悦子・飯塚ひろみ・吉海 直人

〔要旨〕『河海抄』は貞観元年（一三六二年）頃に四辻善成によつて作られた『源氏物語』の注釈書であり、源氏学初期の集大成で、以後の注釈の規範的位置を示すものである。『河海抄』執筆の基本的姿勢は『源氏物語』を歴史の中に置き、いかにその文章や構想が歴史的事実に依拠したものであるかを詳細に説明している。特に、本報告で扱った「料簡」はその性格が強く、「いづれの御時にか」で繙かれる『源氏物語』の虚構世界を「醍醐・朱雀・村上天皇」の三代の御代に設定し、主人公

光源氏の解釈も実在の歴史上の人物に依ること、新たな『源氏物語』の読みを展開している。こういった視点は原典をより深く読むための手掛かりとなる。

そこで、本稿では同志社女子大学図書館蔵本を底本として、演習に参加した大学院生を中心に『河海抄』の翻刻と注釈を

行った。今回の報告ではその中の「序」と「料簡」を掲載する。

キーワード 「河海抄」「源氏物語注釈書」「料簡」

【解題】吉海直人担当

このたび新出写本『河海抄』が同志社女子大学図書館の所蔵となった。そこで早速これを使って大学院の演習で徹底的な分析を試みてみた。

まず簡単な書誌を記しておきたい。書名は、表紙中央の赤系の題簽に直書きで『河海抄一（〜二十）』とある。表紙の色は薄緑系で、全体に桐の葉と蔓草模様が散らしてある。寸法は夕

テ24・4 cm × ヨコ17・5 cm。装丁は列帖装（糸切れあり）。本来は巻一から巻二十まで全二十冊であるが、惜しいことに巻八の一冊が欠けているので、全十九冊となっている。図書館の整理番号は「913364 Y9734/1~20」。書写者・書写年代ともに未詳だが、江戸中期であろうか。非常に丁寧に書写されている。諸本系統に関しては巻二十の末尾に、

四辻宮大納言家申出中書御本永和二年自孟冬比今永和第五至季春四日書写一筆訖

永和五年三月十四日 散位基重在判

数ならで名をさへかくす身なれどもながれてしのべ水くきのあと

康暦第二季春後八日重申出今校合者也

と奥書があるので、中書本系統の写本であることがわかる。

四辻善成の手になる『河海抄』に関しては、既に玉上琢也『紫明抄・河海抄』（角川書店）や天理図書館善本叢書『河海抄』（八木書店）などがあるので、必ずしも稀書というわけではない。しかし本書には本文異同等が少なからず存しているよなので、新出諸本としての資料的価値は決して低くないと思われる。この輪読作業を通して、参加している院生達各自がそ

れぞれ自分なりの問題点を発見してくれることを期待する。今回は分量の制約もあるので、取り敢えず輪読会の第一回成果報告として、冒頭の「料簡」部分の翻刻と注釈を掲載する。

【凡例】

- ・同志社女子大学蔵『河海抄』を翻刻する。
- ・文字遣いは底本どおりに表示するよう心がけた。
- ・底本における改行は／で示した。改頁は「」で示し、丁数と表裏を「」で記載した。
- ・底本における割り書きは（ ）で示し、割り書き中の改行は（／）で示した。

【翻刻】安永・中村・小坂部担当

河海抄序

光源氏物語は寛弘のはしめにいてきて康和の／すゑにひろまりにけるより世々のもてあそびもの／としてところ／の枕こ（注）、なれり其中に中納言／定家は卷々に難義を注して奥

入と名付け／大監物光行は家々の口傳を抄して水原^{注2}と／
号せりしかあるのみにあらず伏見仙院坊におはし／まし、時間
題を左右にたてまつらしめて／論談のかちまけをあらそはせら
れ後醍醐院御位／のはしめ彼梨壺の歌仙におほせて万葉集をよ
み〔一才〕とかしめし例をうつされけるにや黒戸の人数を／
定て五十帖^{注3}を講せらるゝ義ありしに先師忠守／朝臣七つ
の流の底の心をきはめて九かさねの撰に／應せしかはしきりに
顧問にあつかりてしは／／秘説を奏しきこゝになましるにわ
かむとをりの／すゑをうけてはるかに惟光良清か風をしたふ／
いやしき翁あり桂をおる^{注4}道をまなひしむかし／より椎か
もとのやとりをたつぬるいまにいたるま／てみとりの
袖^{注5}のかはらぬなげきをわすれてむら／さきの筆のあとに
そむる心さしをあらはさんとす〔一ウ〕この故に中葉の林に
あそひてなを／ゆかめるを／わかち前修の海をくみてふかき
あさきをさたむ／をのつからいはねの松^{注6}の人しれぬこと
のはをひろ／ひてわつかに軒はの萩のほにいたすへきかこと、
せりあつめて二十巻とすなつて河海抄といふ／本よりまと
の蛩をむつひす枝の雪をならさ^{注7}／されはあさく見算きける
あさけりをはつと／いへども故を温てあたらしきをしるなかつ

ち／とせんためにいさ、かこれをしるすといふこと／しかり
〔二才〕

河海抄卷第一^{注8}

料簡

一此物語の起に説々ありといへとも西宮左大臣安和／二年太宰
権帥に左遷せられ給しかは藤式部／おさなくよりなれたてまつ
りてなげく比大齋院／（選子内親王／村上女十宮）より上東門
院へめつらかなる草子や侍ると尋申／させ給けるにうつほ竹と
りやうの古物語はめなれた／れはあたらしくつくり出してたて
まつるへき／よし式部におほせられければ石山寺に通夜して／
この事を祈申けるにおりしも八月十五夜の月〔三才〕湖水に
うつりて心のすみわたるまゝ、に物語の風情／空にうかひけるを
わすれぬさきにとて佛前に／ありける大般若の料紙を本尊に申
うけてまつ／須磨明石の両巻をかきと、めけり是によりて／す
まの巻にこよひは十五夜なりけりとおほしい／て、とは侍とか
や後に罪障懺悔のために般若一／部六百巻をみつからかきて奉
納しけり今にかの／寺にありと云々^{注9}光源氏を左大臣にな
すらへ紫の上／を式部か身によそへて周公旦白居易のいにしへ
を／かんかへ在納言菅丞相のためしをひきてかき出し〔三

ウ」けるなるへし〔注10〕其後次第に書くはへて五十四帖になしてたてまつりしを権大納言行成〔注11〕に清書せ／させられて齋院へまいらせられるに法性寺入道関／白奥書をかゝれて云〔注12〕此物語世皆式部か作とのみ思へり老比丘筆をくはふる所也云々誠君臣の交仁義／の道好色の媒菩提の縁にいたるまでこれを／せずと云ことなしそのおもむき莊子の寓言におなしきものか詞の妖艶さらに比類なし一部のうち／に紫上の事をすくれてかきたる故に藤式部の名／をあらためて紫式部と号せられけり〔注13〕一説云藤式部「四オ」の名幽玄ならずとてのちに藤の花の色のゆかりに紫の／字にあらためらると云々（清輔朝臣／説）或説云一条院の御／めとの子也上東門院へまいらせらるゝとて我ゆ／かりのもの也あはれと思召せと申させ給けるに／よりて此名あり武藏野の義なりともいへり或又／作者観音の化身也云々水鏡云〔注14〕紫式部か源氏物／語つくり出して侍るはさらに凡夫の所行とはおほ／え侍らす日本紀を始として諸家の日記にいたるま／てあきらかにさとりもちて時の人云日本紀の局／と号し侍けりとあり凡物語の中の人のふるまひ「四ウ」をみるに高き賤しきにしたかひ男女につけても／人の心をさとりしめことの趣きををしへすといふこ／となし

一物語の時代は醍醐朱雀村上三代に準するや桐壺御／門は延喜朱雀院は天慶冷泉院は天曆光源氏は／西宮左大臣如此相当する也桐壺巻に最初に両／所にてとりわきて亭子院の御事を載たり是御／遺誠〔注15〕也（このころ明くれ御らんする長恨哥の御絵亭子院のか、せたまへる／をそ枕ことにせさせ給云々又こまうとを宮のうちにめさんことは宇／多の御門の御いましめ／あれはと云々）又繪合巻〔注16〕に朱雀院の御事を延喜の御／てつからことの心か、せたたまへるに又我御世の事ともをか、せ「五オ」給へるといへり又昭宣公の母は寛平法皇の皇女延喜帝の／御妹也頭中将致仕大臣の母も桐壺の御門の御一腹とあり此外も其證おほし難者云〔注17〕以前の准拠まことに／其寄ありといへとも此物語は光源氏をむねとするや／されは西宮左大臣に準すること一世の源氏左遷の／跡は相同けれども彼公好色の先達とはさしてきこえ／さるにや今の物語はことに此道を本としたるや如何／答云〔注18〕作物語のならひ大綱は其人のおも影あれと行／跡にをきてはあなちことにこゝ／にかれを模することとなし漢朝の書籍春秋史記など、いふ実録にも「五ウ」少々異なるはあるや仍桐壺冷泉院を延喜天曆に／なそらへてまつりなから或は唐玄宗のふるきため／しをひき或は秦の始皇帝のか

くれたる例をうつせり／又天皇御門は相統の皇胤おはしまさねとも此物語／には朱雀院の御子今上冷泉院の御後なし（或説云此集／有作者之意趣歟／云々）光源氏をも安和の左相に比すといへとも好色のかたは／道の先達なるかゆへに在中將の風をまねひて五条二条／后を薄雲女院臘月夜尚侍によそへ或はかたの、少將の／そしりを思へり又太上天皇の尊号も漢家には大公の／旧蹤本朝には草壁皇子この先跡を摸するや是作物（六オ）語の習也初にいつれの御時にか（注19）とて分明に書あらは／ざざる、も此故なりさりなからしたには延喜の御門／といふ心を含めり此の外或桓武一条院を桐壺御門に／准し又光大臣伊周公を光源氏に擬するといふ儀／もあるや皆以謬説也若桓武といは、其以後の帝／王陽成宇多延喜の御名物語にあり一条院ならば／延喜より後五代の事みえす其上須磨卷にこの比／上手にすめる千枝のつねのりとあり兩人朱雀村／上御代の畫工なり既にこのころといへり一条院ま／て存生せず又綜合に朱雀院を当代のよし載「六ウ」之無異論乎或説云（注20）此物語をは必光源氏物語と号／すへしいにしへ源氏といふ物語あまたある中に／光源氏物語は紫式部が製作也云々は今案歟作／者紫式部寛弘六年日記（注21）に源氏物語の御前にあるを／よませ給とあり水鏡

にも紫式部が源氏物語とかけり／代々集のことは是におなし抑物語証本一様な／らざる歟（注22）行成卿自筆本も悉今世に伝らず源光／行は八本をもて交合取捨して家本とせり所謂／二条帥伊房本冷泉中納言朝隆本堀川左大臣俊房本／（号黄表紙／左大臣書銘）従一位麗子本（土御門右大臣女／号京極北政所）法性寺関白本（唐紙／草子）（七オ）（号尚侍／殿本）五条三位俊成本京極中納言定家本（号青／表紙本）也各雖／為証本皆異同猶勘合古本且可加了見者耶擇其善／者従之古人之美言也（家々所云七本也加光行／本八本歟）

一紫式部者鷹司殿（従一位倫子／一条左大臣雅信女）宦女也（注23）相繼而陪侍上東門院／父は越後守（前か）為時母常陸介為信女也其祖先者閑院左大臣／（冬嗣）次内舍人良門右中将利基中納言兼輔因幡守雅正（イニテシ）／為也後に左衛門権佐宣孝に嫁して大貳三位弁局／（狭衣／作者）を生ず旧蹤は正親町以南京極西類今東北院向也（注24）／此院は上東門院御旧蹤也式部墓所は在雲林院白毫／院南小野篁墓乃西也宇治寶藏日記も紫野雲林（七ウ）院にあるよしみえたり雲林院は淳和離宮也賢木卷／に光源氏雲林院にて六十卷といふ文とかせてき、／給し所也式部は檀那贈僧正の許可を蒙て天台一心／三觀之血脉にいれりかねてより紫野

雲林院の幽閑／を思しめけるを旁ゆへあるにや

一中古の先達の中に此物語の心をは歌には詠へからす／詞をとるはくるしからすといふ一義あれとも心を／とりたる歌撰集の中にあまたみゆ

續拾遺集

権中納言俊忠

なかめつる心のやみもはるはかりかつらのさとにすめる月影〔注25〕「八才」

と読めるは彼松風巻におもひむせひつる心のやみも／はる、やうなりといへる心ときこえたり

同集に

典侍

あかさりし袖かとまかふ梅か、に思なくさむあかつきの空〔注26〕

浮舟の君小野にてこと花よりもこれに心よせの／あるはあかさりし匂ひのしみにけるにやといへる／心にや

新古今集

前太政大臣

白露のなさをきけることのはやほのくみえし夕かほの

花〔注27〕

續古今集

太上天皇（後嵯峨院）「八ウ」

袖の香や猶残るらんたち花の小嶋によせしよはの浮舟〔注28〕

小侍従

うちわたす遠かた人にこと、ひてなをしりそめし夕かほの花〔注29〕

光俊朝臣

このころはゆくせの水をせき入て木陰涼しき中川の宿〔注30〕

鷹司院帥

あかしかた浪の音にやかよふらん浦よりをちの丘の松かせ〔注31〕

是らはみな心をとれる哥也詞をとる哥

新古今に

虫のねもななき夜あかぬ古郷に〔注32〕みしよの夢にやかてまきれぬ「九才」我身こそ〔注33〕在明の月のゆくゑをなかくて

そ〔注34〕続古今／になれよなにとてなくこゑの〔注35〕などいへる

たくひ勝／計へからすおほかた狭衣物語のたつぬへき草の／原〔注36〕哥をも猶本哥に用たる哥近代集にあまた／あるにやひとへに心をとるへからすとさためかたくや／且は俊成卿六百番

判詞にも源氏みざる哥よみ／は遺恨の事也〔注37〕云々又正治奏

聞状〔注38〕にものりなか／もきよすけも源氏をみ候はすとも

うた／てき事に候也〔注39〕とのせられたり尤和語の興造／なる

ものなり「九ウ」

【注】

(1) 「枕こと」は『源氏物語』に一例。普段の話の種。朝夕のことぐさ。

(2) 「水原」は天理本では「水原抄」。源光行・親行らによる『源氏物語』注釈書。五十四卷。書名は「源」を二字に分け、「源氏物語抄」の意を表わすか。

(3) 「五十帖」は天理本では「五十四帖」。誤りか。

(4) 「桂をおる」は『源氏物語』に一例。賀茂の祭の勅使に立つ藤内侍が夕霧と唱和する歌。対策に長じていた晋の郗詵(げきせん)がその才を自賛して〈猶桂林の一枝、崑山の片玉のごとし〉といったという「晉書——郗詵伝」の故事から、官吏登用試験に文章生が及第することをいう。転じて出世する。〈若くして文の道に遊て、一枝の桂をば折てき〉(観智院本三玉絵・序)、道真母〈久方の月の桂もおる許家の風をも吹かせてし哉〉(拾遺・雑上・四七三)、白居易〈桂折一枝先許我、楊穿三葉尽驚人〉(喜敏中及第詩)

(5) 「みとりの袖」とは『源氏物語』に二例。六位の袍をさ

す。夕霧が六位のとき雲居雁の女房である大輔の乳母が〈めでたくとも、もののはじめの六位宿世よ〉(少女・五七頁)と蔑んだことにより、夕霧は昇進前の自分の袍を「みどりの袖」と自嘲的に表わす。

(6) 『源氏物語大辞典』では、〈岩根〉に生えている松。恒久不変なものたとえにしたり、「いは」に「言は」をかためたりして用いられる。と説明されている。実際に『源氏物語』の中に「岩根の松」という表現は全四例見受けられ、この説明通り大きく分けて二通りの使い方がなされていると見てよいだろう。まず少女巻では、秋好中宮と紫の上の春秋優劣論の応酬に二例見られ、〈御返りは、この御箱の蓋に苔敷き、巖などの心ばへして、五葉の枝に、風に散る紅葉はかろし春のいろを岩ねの松にかけてこそ見ぬこの岩根の松も、こまかに見れば、えならぬつくりごとどもなりけり。〉とあるように、紫の上の返歌では不変の象徴として、また歌と共に贈られた実際の作り物として用いられている。続いて柏木巻では、〈誰が世にか種はまきしと人間はばいが岩根の松はこたへむ あはれなり〉など忍びて聞こえたまふに、御答へもなうて、ひれ臥したまへ

り。』という源氏から女三宮への和歌の中に見える。『新編日本古典文学全集』ではこの歌の本歌を『古今和歌集』巻第十七雑歌上（梓弓磯辺の小松たが世にか万世かねて種をまきけむ（九〇七）この歌はある人のいはく、柿本人麻呂がなり）としており、源氏の歌の「松」に本歌の「小松」を響かせ、また「岩根」には「言はむ」をかけ、まだ幼い薫を例えている。そして橋姫巻では、△めづらしく聞きはべる二葉のほども、うしろめたう思うたまふる方はなければ、命あらばそれとも見まし人しれぬ岩根にとめし松の生ひすゑ」書きさしたるやうにいと乱りがはしくて、「侍従の君に」と上には書きつけたり。』とあり、柏木から女三宮へ宛てた歌の中で「岩根にとめし松」に後ろ盾は安定した不義の子薫をここでも例えている。

(7) 『源氏物語大辞典』では、〈螢の光を友とし、枝の雪を慣れ親しんだものにする。車胤と孫康の螢雪の故事による表現。〉とあり、『源氏物語』中に一例のみ用例が確認される。少女巻の〈かかる高き家に生まれたまひて、世界の榮華にのみ戯れたまふべき御身をもちて、窓の螢を睦び、枝の雪を馴らしたまふ志のすぐれたるよしを、よろづのことによ

そへなずらへて心々に作り集めたる。〉という箇所であり、人々の夕霧の勉強に対する姿勢への評価として用いられている。その出典であるが、『晋書』『芸文類聚』『蒙求』『孫子世録』などがあげられるものの、『源氏物語』本文と完全一致するものは見当たらない。そのため物語本文の「窓の螢」や「枝の雪」は作者の記憶違いによるとの指摘がある。

(8) 天理本には、「正六位上物語博士源惟良撰」との記述がある。

(9) 「云々」までが他書からの要約引用である。紫式部の『源氏物語』執筆の起因について、大齋院と上東門院のエピソードが記述されている。当該箇所と類似した記述内容をもつものに、『古本説話集』・『世継物語』・『無名草子』・前田家蔵伝為氏筆「源氏古系図」の冒頭などがある。宮川葉子氏（上坂信男氏編『源氏物語の思惟と表現』・新典社・平成9年）は前田家蔵「源氏古系図」の冒頭本文は『古本説話集』所載の伝承に依拠しており、『河海抄』に先行するものであると述べておられる。また、東望歩氏（『源氏物語』起筆に関する大齋院説話について）「名古屋

大学国語国文学 第百三号・平成22年11月)は『河海抄』の当該箇所作成の参考にした本文として、『賀茂斎院記』をあげておられる。これは『河海抄』が説話や物語よりも歴史的資料を論拠とすることに重点を置いていることと関連する指摘である。

(10) 『源氏物語』がどのような歴史的事実に依拠しているかを説明している。ここであげられた実在人物は左大臣・式部・周公旦・白居易・在納言・菅丞相である。このうち、周公旦と在納言こと在原行平については物語本文に登場する。まず、賢木巻に〈わが御心地にもいたう思しおごりて、文王の子武王の弟とうち誦じたまへる、御名のりさへぞげにめでたき。成王の何とかのたまはむとすらむ。そればかりやまた心もとなからむ。〉とあり、光源氏自身が周公旦、桐壺院が文王、武王が朱雀帝、成王が冷泉帝をさす。〈文王の子武王の弟〉は『史記』の「魯周公世家」の引用であるが、『本朝文粹』においても大江朝綱の「貞信公の撰政を辞する第三表」中で当該箇所が引用されている。この朝綱の詩は『和漢朗詠集』七五六番に所載されているが、当該箇所の記載はない。したがって、紫式部は直接『史記』

にあたった可能性が高く、『河海抄』は賢木巻の当該箇所を基として準拠論の一つとしている。次に、須磨巻に〈おはすべき所は、行平の中納言の藻塩たれつつわびける家居近きわたりなりけり。〉、〈須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波。〉とあり、行平が須磨にちなんで詠んだ〈わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ〉(古今)や〈旅人は袂涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦風〉(続古今)を引歌としている。特に「わくらばに」歌は物語中に須磨巻や蓬生巻などで七カ所の引用箇所があり、これは物語の引歌の中でも多い。行平の須磨謫居の折の歌が光源氏の須磨流謫の下敷きになっていることは明らかである。ここで、ひとつの疑問が浮上する。それは行平の異母弟である業平が『河海抄』料簡の準拠論において名前があがらなかったことである。業平は須磨明石が蘇生される絵合巻において〈在五中將の名をばえ朽さじ〉と藤壺に言わしめている。しかも、須磨巻には業平詠〈いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる波かな〉が引かれている。こういった条件が揃って

ながら、業平が『河海抄』の準拠論から漏れた理由は『伊勢物語』の「むかし男」としての業平像が、歴史的資料に依拠するという『河海抄』の方針から外れていたことによると考えられる。

- (11) 権納言行成は三蹟の一人。『大鏡』に「今の侍従大納言行成卿、世の手書きとののしり給ふ」とある。この行成本は河内家の注釈書に自家の本との本文異同について、触れられており、実際に存在したと考えられるが、齋院に献上した本だったかの真偽は不明。

- (12) 「法性寺入道関白奥書をか、れて云」の解釈は、実際に道長が物語の制作に自分が加わっていたと奥書に自身が書き入れたとするか、源氏物語作成に自分が加わっていたことを傍らの人に言ったという二つの解釈が可能であるが、三条西公条の『明星抄』などには前者で明記されている。

- (13) 紫式部の呼称の由来を列挙している。紫式部の名前で有名なエピソードは『紫式部日記』の寛弘五年霜月一日土御門邸での公任とのやり取りである。(左衛門の督、「あなかしこ。此のわたり、わか紫やさぶらふ」と、うかがひたまふ。「源氏ににるべき人もみえ給はぬに、かの上は、まい

ていかでものしたまはむ」と、聞きゐたり。)この日記中の〈わか紫〉はどのように解釈したらよいか。まず、「若紫」か「我が紫」かについて、『新編日本古典文学全集』

等では若くもない紫式部をからかう意図で「若紫」と呼んだという解釈がとられている。一方で、萩谷朴氏(『紫式部日記全注釈』・昭和46年11月)は人稱名詞として「若紫」は物語中で使用されていない点から、公任が自らを光源氏に、式部を紫の上にみだてて(「光源氏である)私の紫の上はどこですか。」とからかったと解釈しておられる。

この二つの説から式部の通り名について考えると、「若紫」の場合は寛弘五年十一月の時点で式部の呼称は紫式部であった可能性が高い。「——紫」自体に式部を指す意味がなければ「若紫」は冗談として成立し難い。反対に「我が紫」の場合はこの時点で式部の呼称が紫式部であった可能性は低い。もちろん公任が「我が紫(式部)」と呼びかけて、式部が物語の人物にすり替えて、上手くあしらったという解釈も可能ではあるが、それでは公任があまりに間抜けな存在になる。異本『伊勢大輔集』や『栄華物語』には「藤式部」の呼称が確認でき、『大鏡』では「紫式部」

の呼称を確認できる。式部の通り名が「藤式部」から「紫式部」に移行した時期を特定するのは難しいが、公任の「我が紫」というからかいから生まれた呼称であれば、『河海抄』第一義の「紫上の事をすくれてかきたる故に」という説は中らずと雖も遠からずと言えよう。その他に、後半で述べられている「清輔朝臣説」とは藤原清輔の『袋草紙』「雑談」にある〈紫式部ト云名、有二説。一ニハ此の物語中ニ紫卷ヲ作、甚深之故、得此名。一ハ一條院御乳母之子也。而上東門院ニ令奉トテ、吾ユカリノ物ナリ、アハレト思食ト令申給之故、有此名。武蔵野ノ義也。〉を引いている。なお、「武蔵野」は〈紫のひとつとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る〉（古今・雑上・八六七）から。

(14) 『水鏡』に紫式部は登場しない。一方で『今鏡』の「つくり物がたりのゆくゑ」という段に〈昔の人の作り給へる源氏の物語〉に対して白楽天の例と共に、式部に対して、〈女の御身にて、さばかりのことを作り給へるは、たゞ人にはをせぬやうもや侍らむ。妙音観音など申、やむごとなき聖たちの女になり給て、法を説てこそ、人を道引給な

れ」と語っている。この他にも、『河海抄』以前の例では『無名草子』に〈さて、この『源氏』作り出でたることこそ、思へど思へど、この世ひとつならずめづらかにおもほゆれ。まことに、仏に申し請ひたりける験にやとこそおほゆれ。それより後の物語は、思へばいとやすかりぬべきものなり。かれを才覚にて作らむに、『源氏』にまさりたらむことを作り出だす人もありなむ。わづかに『宇津保』『竹取』『住吉』などばかりを、物語とて見けむ心地、さばかりに作り出でけむ、凡夫のしわざともおほえぬことなり〉とある。いずれも『源氏物語』を称賛した評であり、その理由を式部観音化身説として説明しているのである。

(15) 物語の時代設定を実際の皇統と関連して説明を加えている。この論法は『河海抄』以前にも『紫明抄』で〈問云「いつれの御時にかといへるおほつかなし例にひき申へきみかといつれそや」答云「醍醐の帝の御子にこそ朱雀院と申御名もおはしませ又高明の親王も源氏におはしませは延喜の聖主をやひき申へからん」といった問答が行われている。『河海抄』のいう「延喜」は醍醐天皇、「天慶」は朱雀天皇、「天曆」は村上天皇である。物語では桐壺巻に

へこのごろ、明け暮れ御覽ずる長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。へそのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さむことは宇多帝の御誠あれば、いみじう忍びてこの皇子を鴻臚館に遣はしたり。

御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人おどろきて、あまたたび傾きあやしぶ。へ「亭子院」や「宇多帝の御誠」といった醍醐天皇よりひと世代前の宇多天皇の御代が過去の歴史として描かれている。「宇多帝の御誠」とは「寛平御遺誠」の七条（外蕃の人必ずしも召し見るべき者は、簾中にありて見よ。直に对ふべからざらくのみ。李環、朕すでに失てり。新君慎め。へを指す。

(16) 「延喜の御てつからことこの心か、せたたまへるに又我御世の事ともをか、せ給へる」は物語本文絵合巻からの引用であるが、「事とも」の箇所は本文の異同がある。大島本をはじめとする諸本では「事も」であるが、河内本と青表紙本の榊原家は「事とも」である。『河海抄』の物語底

本を検討する上で重要な異同と考えられる。しかし、(注15)で扱った桐壺巻本文には大島本との異同は認められなかった。ただし、桐壺巻本文は割書きでの引用であり、絵合巻本文と同列に扱うべきではない。

(17) 「以前の准拠まことに」から「今の物語はことに此道をも本としたるや如何」までが「難者」の質疑。『河海抄』が光源氏のモデルと説明してきた西宮左大臣こと源高明と光源氏との違いについて解説している。

(18) 「作物語のならひ大綱は」から「之無異論乎」までが(注17)の「難者」の質疑に対する応答。源高明が光源氏のモデルとして歴史的な準拠を担っているならば、在原業平は高明ではなりえなかった「好色の先達」のモデルであると説明している。ここであがっている「五条二条后」とはそれぞれ、仁明天皇の後順子、清和天皇の女御高子である。これらの関係は『大鏡』にも記載される有名なエピソードであるが、伝説的な要素も強い。ここでも、業平は『伊勢物語』の主人公として、現実と虚構の入り混じった存在である。次に、「かたの、少将」とは散逸物語「かたの」の主人公をさす。帚木巻に「さるは、いといたく世を

憚りまめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には、笑はれたまひけむかし」とあり、野分巻に「吹き乱りたる刈萱につけたまへれば、人々「交野の少将は、紙の色にこそととのへはべりけれ」と聞こゆ。」とある。野分巻では夕霧を交野の少将と重ねており、物語の中では必ずしも交野の少将は光源氏のモデルというわけではない。同様に、業平にしても総角巻において「在五が物語描きて、妹に琴教えたるころの、「人の結ばん」と言ひたるを見て、いかが思すらん」とあり、匂宮に業平像が重なる。過去に「在五」「業平」という直接の表現が使用されているのは総合巻（注10参照）であり、間接的に光源氏と重なっているものの、「河海抄」の記述と実際の物語中の用法には隔たりが見られた。

(19) 「いつれの御時にか」は物語の時代設定を明らかにしない作り物語の表現である、ここでは、桐壺帝と光源氏のモデルとして桓武天皇と光大臣こと源光、一条天皇と藤原伊周を例としてあげるものの、その生涯や血縁、物語本文との矛盾といった点から否定している。同様の記述が『紫明抄』に「もし桓武天皇を例とせば平城天皇をはいか、たと

へ申へき西三條の右大臣は桓武の御ひ、こにおはしますうへ左遷事きこえず」とある。

(20) 「或説云」から「代々集のことは是におなし」までが題名について述べている。まず、「いにしへ源氏といふ物語あまたある中に光源氏物語は紫式部か製作也」とは、世の中には『源氏物語』のいうものはたくさんあつて、その中で紫式部が書いたものが光源氏物語と呼ぶという意味である。しかしながら、『源氏物語』の呼称は勅撰集の中でも、『新勅撰和歌集』（源氏の物語をかきて奥に書きつけられて侍りける）（雑二）や『続古今和歌集』（源氏物語の須磨の巻かきて奉りける人に遣はされける）（雑中）のように一定でない。その他に『更級日記』でも「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と、心のうちに折る。」とあり、「光」を冠さない例も散見する。

(21) 「寛弘六年日記」とあるが、誤りか。『紫式部日記』の寛弘五年五月末から六月初旬の日記に「源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧じて、例の、すずる言ども出できたるついでに、梅の下にしかれたる紙に書かせたまへる」とある。この章が式部の日記中で物語執筆の時期が特定できる最も

早い時期の記述である。なお、『紫式部日記註釈』の本文は〈源氏の物語〉が〈源氏物語〉である。

(22) 「抑物語証本一様ならざる歟」から「古人之美言也」まで各諸本について述べている。従一位麗子本は『新勅撰和歌集』の詞書(注20参照)からもその存在を確認できる。

(23) 「紫式部者」から「大貳三位弁局を生ず」まで紫式部の出仕のいきさつや家系について述べている。まず、「紫式部者鷹司殿宦女也」は「鷹司殿_{II}倫子」と「宦女」という表現に矛盾がある。『日本国語大辞典』では「宦女」について「宮中または將軍家などに奉仕する女性。宮仕えの女房。女官。」と説明している。したがって、倫子は道長の妻であるものの、私人であり、それに仕える女性の呼称は「宦女」ではなく「女房」のほうがふさわしい。一方、彰子には「陪侍」とあり、彰子に仕えていた紫式部を「宦女」としていいかという問題はあるものの、「宦女」と「陪侍」の記述は逆のほうが自然である。

(24) 「旧蹤は」から「旁ゆへあるにや」まで紫式部のゆかりの地について述べている。紫式部の住居や墓所については角田文衛氏の『紫式部とその時代』(角川書店・昭和41

年)に詳しく、今の廬山寺、京都御所の東側周辺と特定されている。また、注釈中にみえる「東北院」とは『榮花物語』卷三十二「歌合」の(まことや、女院は、無量寿院のかたはらに御堂建てさせたまへり。)のことで、『榮花物語』の記述は『小右記』などから長元三年八月二十一日の記述と特定できる。「東北院」は康平元年に焼失しており、康平四年に移築されていることから、『河海抄』の「東北院」とは再建後の寺をさす。

(25) 光源氏が大堰を訪れ、明石君と再会する場面。(狩の御衣にやつれたまへりしだに、世に知らぬ心地せしを、まして、さる御心してひきつくるひたまへる御直衣姿、世になくなまめかしうまばゆき心地すれば、思ひむせべる心の闇も晴るるやうなり。)(松風・四〇九頁)。「心の闇」は思い惑って理非の分別を失うこと。煩惱に迷う心を闇にたとえている。在原業平(かきくらす心のやみにまどひにきゆめうつつとは世人さだめよ)(古今・恋三・六四六)。藤原兼輔の(人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるか)(後撰・雑一・一一〇二)から、特に子に対する愛から理性を失って迷う親心をいう。兼輔は三十六歌仙の

ひとり、紫式部の曾祖父にあたる。代表歌とされるこの歌は、『大和物語』四十五段では醍醐天皇の御息所となつた娘桑子のことを案じて帝に奉つたとされている。ここでは、姫君のことを思うがゆえの明石君の親心。

(26) 浮舟が過去の恋を回想する場面。〈閨のつま近き紅梅の色も香も変はらぬを、春や昔のと、こと花よりもこれに心寄せのあるは、飽かざりし匂ひのしみにけるにや。〉(手習・三五六頁)。匂宮のことをいうとされるが、薫のこととする説もある。〈飽かざりし君がにほひの恋しさに梅の花をぞ今朝は折りつる〉(拾遺・雑春・具平親王)による。

(27) 夕顔と光源氏の贈答歌。〈心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花〉(夕顔・一四〇頁)、〈寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのほの見つる花の夕顔〉(四一頁)

(28) 匂宮が浮舟を対岸の家に連れ出す場面。〈有明の月澄みのぼりて、水の面も曇りなきに、「これなむ橘の小島」と申して、御舟しばしさとどめたるを見たまへば、大きやかなる岩のさまして、されたる常磐木の影しげれり。「か見れたまへ。いとほかなけれど、千年も経べき緑の深さ

を」とのたまひて、年経ともかはらむものか橘の小島のさきに契る心は 女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、橘の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬをりから、人のさまに、をかしくのみ、何ごとも思しなす。〉(浮舟・一五〇頁)

(29) 光源氏が白い花を見つけ、独り言を言う場面。〈をちかた人にも申す〉と独りごちたまふを、御隨身ついゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。〉(夕顔・一三六頁)、〈うちわたす遠方人にも申すわれ そのそこに白く咲けるは何の花ぞも〉(古今・雑躰・旋頭歌)による。

(30) 光源氏が紀伊守邸の話をきく場面。〈紀伊守にて親しく仕うまつる人の、中川のわたりなる家なむ、このごろ水堰き入れて、涼しき蔭にはべる〉と聞こゆ。〉(帚木・九二頁)

(31) 明石にいる光源氏が、二条院の紫上に宛てた歌。〈はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして〉(明石・二三六頁)、光源氏が京を想い、琴を奏でる場

面。〈広陵といふ手あるかぎり弾き澄ましたまへるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音にあひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり。〉(明石・二四〇頁)

(32) 『新古今和歌集』卷第五秋歌下(四七三)〈守覚法親王家五十首歌中に 藤原家隆朝臣 虫の音も長き夜あかぬ故郷になほ思ひ添ふ松風ぞ吹く〉を引用したものか。また『日本古典文学全集26』ではこの歌の本歌について、〈鈴虫の声のかぎりをつくしても長き夜あかず降る涙かな〉(桐壺、〈身をかへてひとり帰れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く〉(松風)をあげている。

(33) 『新古今和歌集』卷第八哀傷歌(八二九)〈返し 撰政太政大臣 見し夢にやがてまぎれぬわが身こそ問はるる今日もまづ悲しけれ〉を引用したものか。また『日本古典文学全集26』ではこの歌の本歌について、〈見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちによがてまぎるるわが身ともがな〉(若紫)をあげている。

(34) 『新古今和歌集』卷第十六雑歌上(二五一九)〈撰政太政大臣、大将に侍りし時、月歌五十首よませ侍りけるに 有明の月のゆくへをながめてぞ野寺の鐘は聞くべかりける〉

を引用したものとと思われる。

(35) 『続古今和歌集』卷第三夏歌(二〇〇)〈中務卿親王家百首歌に 源具氏朝臣 郭公なれよなにとてなくこゑの五月まつまはつれなかるらん〉を引用したものと思われる。

(36) 『狭衣物語』卷二(たづぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露)を引用したものか。しかし、『新編全集29』ではこの歌に〈憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ〉(花宴)を出典としている。

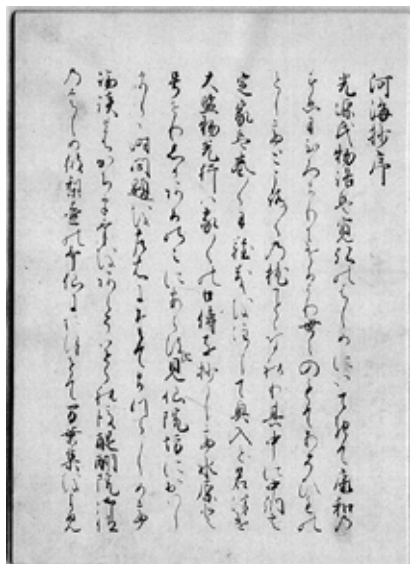
(37) 『六百番歌合』冬上 十三番 枯野(源氏見ざる歌詠みは遺恨事也)〈判詞〉が出典と考えられる。

(38) 『正治二年俊成卿和字奏状』のことである。

(39) 『正治二年俊成卿和字奏状』に、〈その哥は、源氏物語に、二月の花の宴の巻に、内侍督におぼる月よといはせて候を、教長も清輔も源氏を見候はず、(略)夏の夜とかきて夏の部に入て候。教長・清輔ともいうたてしき事候也。〉とあり、これが出典と考えられる。

※ 注に用いた『源氏物語』の本文は小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』によった。

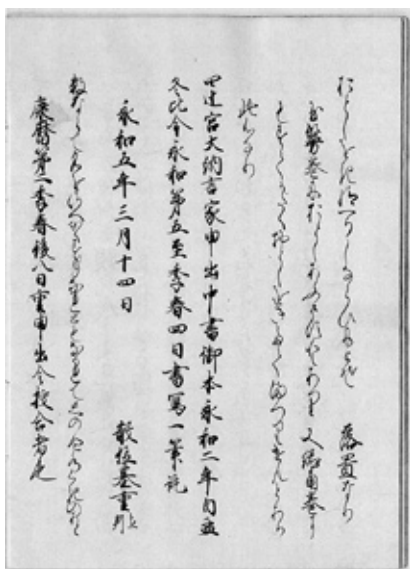
※
9 ～ 24 担当安永
1 ～ 5、25 ～ 31 担当中村・
6 ～ 8、32 ～ 39 担当小坂部・



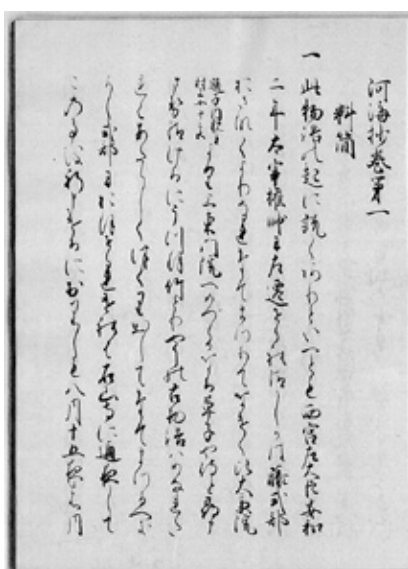
図版 2 序



図版 1 表紙



図版 4 奥書



図版 3 料簡